

宮田 光雄（1983年）若き教師たちへ

4 教育の原点を問う

こうした状況の中で、あらためて教育の《原点》に立ちかえることが求められているであろう。これまでみてきたように、学校教育の社会的機能を一つの事実として確認することは、けっして教育が個々の人間にたいしてもつ人格的契機を否定するものではない。すなわち、教育は、一方的な社会的編入と同化の過程につかない。むしろ、子どもたちの可能性と創造性を十分に開花させるという理念的志向が、依然として残されているはずである。学校は企業の論理に仕えるためにあるのではない。その時代の要請にただ従っていくのが教育ではない。学校教育は、あくまでも子どもたちのためにある。こう考える権利を最後まで捨てることは許されないであろう。

教育のいとなみを通して、子どもたちは基礎的学力や広い教養を身につけていく。そこで獲得された読み書きの能力は、たとえば企業の経営方針を容易に伝達させることをたすけるかもしれない。しかし、同時に、それは就労規則の不合理を見抜く力にもなる。徴兵通知を判読しうる力は、反戦ビラを理解しうる力でもある。「だれがどのような《つもり》で教育しても、その教育は教育を受けたものの主体性によって、そのもののしあわせに貢献するかたちでしか、生かされることはない」（斎藤次郎『瀕死の教室』1982年）。ここに教育にたいする大きな可能性への信頼の根がおかれねばならない。じっさい、現代の高度工業社会では、たとえば国際競争力という観点からだけでも、将来の創造的知性を育てるために、教育の《創造性》にまたねばならない。学校教育は、けっして体制維持のための《教学》機能のみ果たしているわけにはいかない。いな、すでに基礎的学力を維持するためにも、学校教育はミニマム《相対的自律性》の空間を持っていることが不可欠であろう。そこには、《専門》家としての教師による授業の余地が残されているはずではなからうか。こうした教育実践がなされるかぎり、子どもたちの主体的な学習と自由な人間関係の可能性は、けっして絶無ではないであろう。